北海道

支援 身内でなくても

ふるさとは樺太
サハリン残留日本人の今 7

一時帰国者の集いで、小川峡一・日本サハリン同胞交流協会会長（左）に「後継者」として紹介される斎藤弘美さん（中央）。関川勝子さん（右）は主に道内での活動に携わる＝9月20日、札幌市中央区

サハリン残留者や帰国者らを支援する20人近くが12月6日、札幌市中央区の道立道民活動センター「かでる2・7」の一室に集まり、意見を交わした。

「帰国者の若い世代にも仲間に加わってもらい、距離を縮めよう」「日本語に慣れていない人のために会報はロシア語でも書こう」……。話し合いの中心にいたのは東京都台東区の斎藤弘美さん(56)だった。

帰国支援を23年間続け、来年3月に活動を終えるNPO法人「日本サハリン同胞交流協会」。主なメンバーは70～80代になり、「余力のあるうちにバトンタッチしたい」という会長の小川峡一（よういち）さん(81)から8月、「若いあんたしかいないんだよ」と託された。

24年前に出会い 活動継ぐ

斎藤さんは身内に残留者も引き揚げ者もいないが、私心のない貢献を小川さんは評価。「『（残留者に）出会ってしまった』者として責任を感じた」と引き受けた。12月発足の支援組織「日本サハリン協会」の代表として活動を引き継ぐ。

ラジオ局アナウンサーをはじめ、報道系番組の進行役やフリー記者として国内外のニュースに関わってきた。「出会ってしまった」のは1988年、サハリンに渡航できるようになった直後に旅行した時だ。

ユジノサハリンスク（豊原）で、物陰からそっと呼ぶ声があった。日本語を話す男性についていくと、アパートの一室に日本人女性5、6人が集まり、貴重な米を持ち寄ってご飯を炊いてもてなしてくれた。当時、日本人のサハリン訪問は残留者にとって大きな関心事で、「日本人がやって来る」という情報が伝わっていたらしい。

帰国後、お礼にカーディガンを送ると、大学ノートの切れ端に書かれた感謝の手紙が届いた。「大きなお年玉 胸がドキドキしてます」とつづられていた。バブル経済に浮かれる日本の隣で、祖国に帰れず、物不足にあえいで暮らす日本人がいることに衝撃を受けた。それがきっかけで支援活動に加わり、もう20年以上になる。

永住帰国した高齢世代は健康不安が増え、子や孫は就学や就職で苦労する人が多い。日本語の習熟度や地域への溶け込みも様々だ。こういった人たちの手伝いをしたいと斎藤さんは言う。「苦労して日本に戻ったのだから、『帰国して良かった』と思える人生を全うしてほしい。その子や孫の世代にも……」＝おわり

（この企画は熊井洋美、石橋亮介が担当しました）

朝日新聞
北海道支社
〒060・8602
札幌市中央区北2条西1-1-1

情報は
北海道報道センターへ
hokkaido@asahi.com